英米文化学会　第 174 回例会のお知らせ
（例会担当理事：河内裕二）

日時：2025 年 3 月 8 日（土）午後 3 時 00 分～
午後 2 時 30 分受付開始
場所：武蔵大学江古田キャンパス（東京都練馬区豊玉上 1-26-1）
8 号館 5 階 8502 教室 &Zoom*

*武蔵大学江古田キャンパスを会場として使用し、同時にオンライン(Zoom)のよるハイフレックス開催の予定。

非会員で Zoom 参加を希望される方は、お名前とご所属を明記し参加希望のメールを事務局 MichioTajima(at)SES-online.jp（注：@を(at)に書き換えてあります）までお送りください。ミーティング ID とパスコードをお伝えします。

開会挨拶

（3：00－）

英米文化学会会長　君塚淳一　（茨城大学）

研究発表

1. ネオ・ノワールとしての『ダーティハリー』：グローバル・ノワールの視点から

（3：10－3：50）

発表　大勝裕史（千葉商科大学）
司会　君塚淳一（茨城大学）

2. ペックとボールドウィンの抵抗の戦略：*I Am Not Your Negro* と *Exterminate All the Brutes* について

（4：00－4：40）

発表　宗形賢二（日本大学特任教授）
司会　河内裕二（尚美学園大学）

閉会挨拶

（4：40－）

英米文化学会副会長・事務局長　田嶋倫雄　（日本大学）

総会

（4：45－）

発表抄録

1. ネオ・ノワールとしての『ダーティハリー』：グローバル・ノワールの視点から

大勝裕史（千葉商科大学）

1940 年代に現れたフィルム・ノワールは、1950 年代後期に収束した後、1960 年代末に復活する。本発表ではネオ・ノワール作品『ダーティハリー』（Dirty Harry, 1971）におけるノワールの捻れた系譜性を、グローバル・ノワールの観点から解明する。ノワールの文学的な源流であるハードボイルド探偵小説は、探偵を犯罪者と警察の間で立ち回る「中間の存在」として描いた。ノワールの休眠期に、中間者の役割を保存したのが、日本の侍映画『用心棒』（Yojimbo, 1961）とその非公式のリメイクであるイタリアの西部劇『荒野の用心棒』（A Fistful of Dollars, 1964）だった。『ダーティハリー』は、後者で対立陣営の間で立ち回る用心棒を演じたクリント・イーストウッドを、違法な捜査で（最終的には警察組織を離脱して）犯人を追跡するグレーゾーンの刑事として起用している。

2. ペックとボールドウィンの抵抗の戦略：*I Am Not Your Negro* と *Exterminate All the Brutes* について

宗形賢二（日本大学特任教授）

本発表では、Raoul Peck（1953 年－）の 『私はあなたのニグロではない』（*I Am Not Your Negro*, 2016）および『すべての野蛮人を根絶せよ』（*Exterminate All the Brutes*, 2021）について、ラウル・ペックのインタヴューを基に、作品編集を中心とした表現方法について検討する。前者は、James Baldwin の未完の原稿をペックが編集し、人種差別をボールドウィンの視点からドキュメンタリー映画として制作したものである。後者は、Joseph Conrad の *Heart of Darkness* (1899)中の言葉を、Sven Lindqvist が 1992 年に出版した「学際的文学」の題名に使い、それを下敷きにペックが映像化した作品である。ペックが示す西洋の人種差別の根源はタイトルの『すべての野蛮人を根絶せよ』に尽きる。植民地主義と白人至上主義の歴史を映像作品で解体するための手法は、伝統的なドキュメンタリー形式の破壊である。過去と現在、文明と野蛮、美と醜などを一見脈絡なく並置し、視聴者に謎と緊張を強いることで、西洋文明に飼い慣らされた合理的感覚を壊し、「チタリングズ」のような混沌とした世界を作り出した。既成の西洋（白人）文化の映像の歴史に組み込まれない、いわば映像による「抵抗のコラージュ」であると考える。